

バスハイク 美術館・信州花フェスタへ



6月11日



第 701 号
発行人●豊丘村公民館 館長 原 国人
編集人●長野県下伊那郡 豊丘村公民館報 編集委員会
0265-35-9066
印刷所●龍共印刷株式会社

私たちの村
(7月1日現在 ※外国人を含む)
男 3,330人
女 3,358人
総人口 6,688人
世帯数 2,158戸

新緑の中83人参加

心の癒やし

山田 杉江敏子

令和最初のバスハイクは、
“安曇野ちひろ美術館・アトヒルズミュージアム・信州花フェスタ”の行程です。
今年度から新たに入会された方の参加もあり、八十三名バス二台で不安定な天候を心配しながらの出発でした。車窓から麦畑や田植えの終わった田んぼや松食虫にやられ茶色になった山々を眺めながら、異変とも感じる天候の話に世の中はどうなるの？と言っているうちに“ちひろ館”の見学です。何回訪れてもあの優しい絵には魅せられてしまいます。アトヒルズのガラス工芸の細工に感動し、堀金の“四季の郷”では超豪華な食事を満喫し、

華な食事を満喫し、
“花フェスタ”では豊丘のサボテンの展示があるとの事で、これだけは絶対見なければと最初にドームに直行し、笹久保の大倉さんの立派なサボテンを拝見。家のすぐ近くにハウスがあるのに、初めてたくさん見る事ができました。雨にも降られず、館長さん・松村さんの行届いた心配りにより、すばらしい“心の癒やし”の旅ができました。



豊丘産のサボテンが展示された



豊神 毅教育
長が、七月一日、
不慮の事故により
急逝しました。

豊神氏は、昨年四月一日付で教育長に就任し、多くの教育施策の実現に尽力されました。猛暑に見舞われた昨年には、いち早く小中学校にエアコンを整備し、懸案の林原運動公園の整備構想を具体化。ソフト事業では、若い世代によるリニアシンポジウムの開催を実現されました。
本年は、中央保育園の改修による休日の子供の遊び場の開設、中学生の英語検定費用の補助制度の導入。最近では、新学習指導要領により英語教育が本格化する中、小学生対象の英会話イベントの開設など、本村の教育行政を強力に推し進めていただけに、道半ばで帰らぬ人となり、本村にとって大きな痛手となっています。心から冥福をお祈りします。
(公民館長 原 国人)

時事問題セミナー

6月6日

田園回帰の時代がやってくる

講師 藤山 浩氏

成人講座運営委員

壬生康正

現在テレビ番組で「ぼつんと一軒家」というのをやっていて結構人気があると聞きました。今でも人が住んでいる場所もありますが、廃墟となっている場所もあります。その場所がかつて地域の歴史、そして住民一人一人の人生、ストーリーがあった場所でした。しかし今となってはストーリーが途切れた場所、終わった場所となっています。

それは誰かが終わらせようとしていたわけではなく、時代の流れや人の移り変わりによりそうなってしまったのです。自然な止められない流れであり、いずれ私たちの住んでいるこの場所もその流れに巻き込まれていくのではないかと、漠然と考えていました。地方創生や地域の再生なんて無理なのではないか、とも感じていました。

人生、ストーリーを引き継いでくれる人がいればストーリーは次へと続いていきます。それが重なって、つながっていきばコミュニケーションは持続可能となります。とは言え、じゃあ、どれだけ頑張らなければならぬの？って今回先生の話を聞いてみたら人口の1%、消費の1%を取り戻すことで良いとのこと。さらに豊丘村ではすでに人口の〇・六%を村の力でやってくれているので、村民の力で残りわずかの〇・四%頑張れば持続可能になるとのこと。たったそれだけで、終わってしまうであろう地域のストーリー

リーがつながっていくのです。なんとかなりそうな気がしてきました。みんなが協力すること、力を出し合うことが未来へつながっていく。ただどこまでが猛烈に頑張らなくていい。まずは一人一人が〇・四%頑張るだけ、また経済についてもほんの少し地産地消を心掛けるだけで本当に変わっていくのです。よそで既に成功している事例も紹介されました。できることから取り組みましょう。



では我々は何故その取り組みをするのでしょうか。冒頭でも書きましたが、ストーリーが終わってしまうのは自然な流れ、必然の流れです。なぜその流れを巻き戻すのでしょうか。自然な流れに身を任せるのではない

ないのでしょうか。よそでも同じ取り組みを始めた場合、「1%」の取り合いになっしまうかもしれません。戻ってきてくれた「1%」のせいで今までと雰囲気が変わってしまうかもしれません。やることはよつとだけで良いのです。
先生から教えてもらえないか。誰のために、何のために、なぜそれをするのか。それは自分たちで考えていきたいと思います。

(宮下正弘)

段丘

◆色をみつめる◆生活の中では当たり前のように相対的な色が、自分たちの周りには存在している。この色も、光があつて初めて色として認識できるのだが、当たり前の存在のため気にしない日常になってしまっている。

カラー写真が主流となっている現在、誰もが色付きの世界に感動が少ないのは、撮り手の責任でもあるのだが、納得させるには形『造形』がしっかりといていなければ、うならせるものにはなつてこない。では白黒の世界はどうだろう。色が無いぶん色を想像できる。温もりが備わっている。いま若者に人気があるのである。こうしたことと納得できる。

見慣れた日常にあふれるひとつの色彩に感動したことはあったのだろうか。花がきれいに咲いていると感動するのと同じ色があつてからこそ、暗闇の中では見ることができない。きれいだ、美しいと感じることに人それぞれ、好きな色があるから、好みの色に出逢った時は思わず顔がほぐれる。嫌いな色やきたない色には目を逸らして、見なかったこととなるのだ。組み合わせる色たちにも相性という取り合わせがある。一般に補色では反する色のため、強烈な印象となつて記憶に残る。同じ色同士では同系色の関係となり、主張はしないが落ち着いたまとまりを見せてくれる。人間は色彩をうまく使いこなせる動物だから、自分の色を大切に心豊かな人生にしたい。

寄稿

竜神大橋への想い

市ノ沢 奥山義臣

「竜神大橋」は令和五年度の供用を目指して計画が進められています。

豊丘村にとって、北の玄関口として、新時代を切り開くパワーがあると期待されています。私も豊丘村が、飯伊地区のリーダーとして明るく開けて行く未来が見えるようで、大きな喜びを感じています。

さて、ここで私が小学校二年生の時に、担任の先生が語り聞かせてくれた松川町の台城に関わる民話を紹介します。

『昔々、戦国時代に、織田軍が攻めて来ました。圧倒的な兵力で、たちまち敵軍

にとり囲まれました。織田軍は滝川原の高台から火矢を放ち、台城は炎に包まれました。すると、空はにわかにかき曇り、霧がたちこめ何も見えなくなりました。やがて霧が晴れると台城の炎は消えていました。二度、三度と攻撃しても、同じように消されてしまいました。織田軍の大將は、天竜川に魔物がいるにちがいないと思い、兵士に天竜川に向かって矢を射るように命じました。すると間もなく、天竜川は赤く血に染まって行きました。そして、巨大な大蛇が現れ、兵士と戦いましたが、息絶えてしまいました。

ます。そして、正しく、竜が潜んでいそうな迫力ある川になっています。地域の守り神として竜の民話が語り継がれているのです。台城は大蛇が城と呼ばれていました。

子供達の頃に聞いた民話ですが、強い印象とともに、なつかしく思い出します。

今、万年橋から上流をながめると、堀切と言われている切り立った岩の続く所で、川の流れが直角に折れ曲がって、青い淵をつくっているのが見えます。

天竜川は、上伊那地区の小さな流れから、台城付近より激流となり、大河の様相をもつて流れ下り



「竜神大橋」の完成イメージ

蛇川下流域三六災害体験談 (4)

上村では、細い川もあふれ山もくんだ

聞き手 原 章 (古畑)

☆上村の全体的な状況はどんなふうだったか覚えていますか。蛇籠を置いたり家々から畳を持ち出したりして寝ずに蛇川の水が堤防を越えるのを防いだりしたといった記録もありますか、どのような状況でしたか？☆

「こちら辺（蛇川橋近く）はかなり危なかったと思う」

「北入の方から下井が流れて来ていて県道の下を通っているが、あそこにも何か引つかつて水があふれた。何か詰まったらしい。上村には細い川が幾つかあるけれど、物が詰まって湖のようになって水の行き場がなくなる。三六災も含め大豪雨の時には大騒ぎになる。蛇川も怖い、近くのちよつと

した川や水路（上井、下井など）などが詰まったりすることは、案外おっかない。まさかというような川へ物が詰まってあふれるようになることになる。下井と同じで上井の水も蛇川の水を北入から引き入れている。三六災のような時は水の取り入れ口を第一にふさぐことが大事だ」

「上の方では北入にさしかかるところの梨畑が崩れた。水路が下にあるので詰まるかもしれないと大騒ぎになった。そして、それからまもなくこつちの方の別の山がくんだ時に火柱が立った。ちよつと山と川の中段がチャチャと光ったと思ったら、ダーンと崩れて不思議な現象も起こった。気持ち



蛇川下流、伴野、林の三六災害被害状況

悪かったし、心配だった」

「蛇川近くの家から畳を持ち出して蛇川の土手の際に並べた。それから、蛇川の土手、堤防の所に蛇籠を幾つか持ってきて斜めに置いていた。そういったことをどの程度の規模で行ったかは、余裕がなかったのか詳しく分からないが、とにかく大変だった」

（続く）

寄稿

三千枚の絵手紙

中部 久保田義夫

を競う水石展を開催した。やがて職場が変わり定年になり小生は郷里へ帰った。ある時彼が重病で長期入院しているとき病室へ見舞いに行った。それから時々激励の見舞いや葉書を出した。退院した彼から時々絵手紙が来るようになった。彼の絵手紙の絵に對し小生は季節の味を写真で届けるようにし、それに俳句を添えるようになった。彼の最初の絵手紙は平成十五年五月に始まっており、何時の頃からか毎日届くようになった。

日々その届くのを待っていた。絵手紙は百二十枚入の葉書ホルダー二十五冊積まれている。小生は記録では、平成十七年より俳句を始めたことになっているが、日曜祭日を除き風景、植物、動物等の季節を捉えることに努め写真にして毎日届けた。これは俳句の勉強にもなり季節を楽しみ、暮らしの核の一つになっていた。何時もポケットにカメラと筆記用具を入れて、写したりメモしたりしていた。

彼は小生に刺激されたのか俳句を作るようになり「春野苑」なる句集を上梓した。また絵手紙展を開催したこともある。偶然なことながら良き友を得て長い間、暮らしに張りのある毎日をごすことの出来たことは老いの身にありがたく思っている。彼の安らかな冥福を祈っている。

けたが、斜面で日当たりが良い土地という環境が似ていることに気づき、早速本格的に取り組み始めた。目論見通り順調に出荷量を増やすことができた。十一月末からの十十五日間が超多忙という短期勝負であり、応援を得て対応している。今でも愛知方面から、自分も栽培しようとの思惑で視察に見えるが、実際に事業化を果たしたということはない。メリヤスという南天という先見の明で見事に花を咲かせ、今日の安定した生活をもたらせたと言えるだろう。

九十歳の現在でも聴力、視力、脚力のいずれも問題ない。この健康体は些細なことを気にせず、物事に没頭する集中心、そして夫婦円満であることの相乗効果であろうと感じた。お互いに過去一回の入院歴があるだけに、現在もすこぶる健康であり、特に芳彦さんは月一回の健康診断を欠かさない。車の運転も続けているが、家族から喚起を受けることも多くなり細心の注意を払うようにしている。

シリーズ「元気な高齢者」(57)

メリヤス、南天と思い切り、掴んだゆとり人生

武田芳彦さん

九十歳

上垣外在住



昭和四年に三人（男二人、女一人）きょうだいの長男として現在地に生まれた。父親は教員で、著名な歴史家でもあり、幼少の頃から強く教員を勧められたが、なぜか気が向かず、広大な土地で養蚕を主として農業を営んでいた祖父の影響を受け、上伊那の農学校へ進んだ。当時は戦時下で、軍事教育が主であった。また食糧難であったため、月二回の帰宅時には食料をリュックに積み寮に戻るのが常であった。そ

して卒業時には終戦となり、必然的に農業の道へ進んだ。まず養蚕技術を習得すべく祖父の元で手ほどきを得た。市場はしばらくは順調であったが、その後暴落してしまい将来に不安を感じたため、蚕を止め桃栽培に移り、その後りんご栽培、更に乳牛の飼育を行っていた。その頃三十歳の時、四歳下のノブさんと結婚、やや不安定な環境ではあったが充実した生活であった。

しかし二年後に発生した三六災害が大きく運命を変えた。近所の人々の多くが以前の農業の復興を目指した中、芳彦さんはほとんど農地を流されたこともあり、農業をきっぱりとあきらめ、メリヤス業に転換したのだ。和歌山で講習を受けた基礎技術を習得し、手袋製造から始め、その後メリヤスに転じた。当時飯伊地区では

関わっている人は少なかったが、将来性に懸けた。一千万円近い高価な機械を購入し自宅に設置、当初は何かと故障勝ちで苦労したが、昼夜を分かつ懸念に働いた。機械がほとんどを処理してくれるため、製品化は夫婦二人だけで対処できた。東京と一宮が主要な取引先であり、東京へ納品する時は、早朝三時に自宅を出発し自ラトラックを運転して納品するという生活を毎週行っていた。軌道に乗ってからは座光寺にも工場を増設した。八十年前後までのおよそ四十年間携わったが、業界の海外移転など価格低下が懸念されたのをきっかけに、きっぱりと見切りを付けシルバー人材センターに入り、草刈り作業を主体に七年間ほど身を置いた。

そんな時、自宅近くで南天栽培しているお宅を見か

けたが、斜面で日当たりが良い土地という環境が似ていることに気づき、早速本格的に取り組み始めた。目論見通り順調に出荷量を増やすことができた。十一月末からの十十五日間が超多忙という短期勝負であり、応援を得て対応している。今でも愛知方面から、自分も栽培しようとの思惑で視察に見えるが、実際に事業化を果たしたということはない。メリヤスという南天という先見の明で見事に花を咲かせ、今日の安定した生活をもたらせたと言えるだろう。

九十歳の現在でも聴力、視力、脚力のいずれも問題ない。この健康体は些細なことを気にせず、物事に没頭する集中心、そして夫婦円満であることの相乗効果であろうと感じた。お互いに過去一回の入院歴があるだけに、現在もすこぶる健康であり、特に芳彦さんは月一回の健康診断を欠かさない。車の運転も続けているが、家族から喚起を受けることも多くなり細心の注意を払うようにしている。

仕事から離れた父親の影響を受けて歴史に興味があり、史学会に入り現在は休会中、歴史研究として国内を始め、韓国、中国、タイまで足を伸ばしたことは楽しい思い出となっている。また区史作成委員になり区史の完成を成し遂げた喜びはひとしおであった。他には若い頃に野球、ソフトボール、カラオケ等に興じ現在は植木で気分を癒やしつつ南天栽培に精を出している。

文責 桐崎 長一

鉄道全国旅歩き

第12回 路面電車と地下鉄

北市場三

山本義彦



路面電車（以下トラム）が日本で最初に出たのは明治二十八年の京都だった。トラムの発祥はイギリスでその後ヨーロッパ各国や世界の国々に広まり現在も庶民の足となっている。数年前ロシアのウラジオストクとハバロフスクでトラムに乗ったが乗客は多く座席はほぼ満席。小さな日本人が一人乗っていると、日本でもお馴染みだった、がま口を大きくしたような鞆を首から掛けた親切な女性車掌が手招きであそこが空いたから座れと促してくれたのは忘れないし、車掌が乗っていることにもびっくり。すでにワンマンが当たり前の時代に、さらに運転士もほぼ女性で有る事にも。これはたまたまシベリア鉄道に乗りたくて渡航した時の副産物であったことは幸運だった。ロシア極東は今でも貧しい。現在フィンランドなどはその路線数の多さなどでは世界一かも。もと

もと貴族や、荷物を運んでいた馬車が、発展して馬車鉄道になりやがて電車に進化する。東京でも馬車鉄道が明治十三年に開業した。トラムは道路へ線路を敷設すれば、あとはトロリー（電線）を引けば良いし、保守も安易で乗降も簡単に便利。ところが自動車の発達と共に邪魔になり地下鉄（メトロ）に。車の発達ばかりではなく住宅の密集地が多い大都市ではトラムより先にメトロがすでにあり、日本では昭和十二（一九三七）年に東京銀座線開通。ロンドンではもっと古く、メトロポリタン鉄道が運行したので、地下鉄のことをメトロと言うようになったようだ。

またメトロは第一次世界大戦頃から防空壕の役割を果たしたため、大深度の国もある。メトロの欠点は何処を走っているか、もし駅外で事故で止まったら不安だ。また地下へ降りたり、

上がつたりで大変。最近ではエスカレーターやエレベーターが主要駅に完備されたが小さな駅はまだ、しかし早いことは確か。反面トラムはのんびりしているが目的地が見えているので安心感が有る。次世代の交通機関として世界中で見直されている。実は私が子供の頃から父に連れられ愛知県の親戚に行くと、飯田線で豊橋へ出たことが、全国鉄道旅の原点になったが、その豊橋駅を出た前の道路にトラムがあった。子供心にバスでは無く電車が道路を走っていることの衝撃は大きく、この歳になっても忘れない。



ロシアのトラム

北は札幌から、南は鹿児島それぞれ特徴があるが、函館、広島、高知、長崎、松山の坊ちゃん電車は面白い。

高知のトラムはもしかしたら国内一かも。ヨーロッパでは市街地にトラムを張り巡らして自家用車乗り入れ禁止の国も存在する。車に追いやられ廃止になった道路が、今度は車の渋滞に悩まされる昨今、ニューヨー

クでは自転車の方が早いと車の間隙を縫って走る危険な皮肉が見られるようだ。

村長・村議選を終えて（二）

二十代 女性（河野）

議会の仕事内容がわからない、各区長との役割の違いがわからない等、議員さんほもつと議会の意義を広めてほしいと思います。定員割れするなら議席を減らしたほうがいいという声は、議会の意義が伝わってこないこともあるのではないのでしょうか。

三十代 女性（河野）

もともと豊丘村の子育て支援の手厚さに惹かれて移住してきた。現村長の方針

を応援している。若い人が政治に無関心なのは、あきらめているから。誰がなっても一緒、意欲のある人がいない。幼い子がいる親の為に手軽に投票できるよう工夫していただきたい。

四十代 男性（神稲）

今回の村長村議選にはあまり関心がなかった。というのも、選挙にならなかったから余計に興味になかったと思う。選挙にならないのなら、議員の十四議席は多いのではないだろうか。

普段の生活で議員に関わる事がないので、よく分からない。村政は無難にやっていて、批判される事をしていないのかな。安定しているのは良いことだと思う。

四十代 女性（神稲）

今までできなかった事が加速的に実現できる時代になりました。古い常識を超え未来を創る若い世代を信頼し叶えたいことを応援してください。性別や年齢、地域を超え互いに尊重できる笑顔の人生を共に実現したいという。美しい顔、よい声、そしてその神技、伊勢参りには欠かせない名高い名物であった。

お杉お玉の火（一）

市沢治助

私の祖母は天保生まれの老人で、炬燵の中の昔話にこんな話を繰り返し繰り返して語ってくれました。

昔、伊勢の宇治橋のたもとにそれは美しいお杉、お玉という姉妹の芸人がいて、毎日むしろの上に座って参詣の人々に三味線の弾き語りに艶歌などを聞かせていた。人々はその前に集まって歌を聴きながら、隙を見つけては娘たちの美しい顔めがけてハッシと硬貨を投げつける。もし顔に当たることができれば娘の前に積まれた銭はみんなもらえるという賭け。人々は我こそはと競って投げつけてはみるが、当る前に弾いている三味線の撥でパチリパチリと払い落とされ、調子ひとつ乱れず三味と歌は続いて

ましよう。

六十代 女性（河野）

新議員の方の抱負をお聞きし、思いが具体的な方ほど、心に訴えてくるものを感じました。私はこういう村にしたいという自分自身の信念をどんどん行政にぶつけていって欲しいと思います。

六十代 男性（神稲）

首長と議会は車の両輪と言われ、良い緊張関係を保ちながら村のあるべき姿へ導いていただきたい。議会は、質問や追認が中心の運営から、自らの議案の提案をもっと増やしてい

た、できれば活性化し、住民の議会への関心も高まるのではないかと思う。

七十代 女性（神稲）

無投票で残念であった。公約が不明確で、またポスターを貼らずじまいの人もいた。①議員報酬が少なく、なり手がない。②人口に対して、また近隣町村に比べても定数が多い等、課題は多い。他町村の知人からは「豊丘は裕福で良いな」と言われることもある。若い人達が、将来安心し自信を持って暮らせる村となるために、一層機能した議会となるよう望みたい。

憎い男たちの住む古町村の方向へ二個の怨霊の火の玉となつて彷徨し始め、今なお繰り返している。これがお杉お玉の火の由来と祖母は語りました。

（次回に続く）

（豊丘村民話集・第巻輯（昭和五十二年）より）

文責 王生雅穂

こちら資料館 ①96 「日本の蝶」全種が集合

本年度の資料館特別展を「日本の蝶コレクション展」と

題して八月十日（土）〜十八日（日）の九日間、ゆめあるてオーブンスペースで開催します。今回は、村内外の蝶愛好家三名の協力をいただいて、日本に生息する蝶約二四〇種の標本をウインドー内に展示します。また、生きた幼虫の展示やチョウの生態をまとめたDVDも上映します。

この機会に、美しくも不思議な蝶の世界に直に触れ

ていた、だいたいと思います。また、二四〇種のうち約半分が豊丘村を含むこの地方に生息しているとのこと。自然豊かなこの南信州のよき素晴らしさを再認識する機会にもしてもらえたら幸いです。

さらに、記念イベントとして、地元の蝶愛好家、阿部繁氏と仲平淳司氏の指導による「蝶の観察会・標本作り講習会」を八月十二日

（月・振替休日）に計画しています。対象は小・中学生とさせていただきます（親の同伴可）。詳しくは学校を通して配布しますチラシをご覧ください。



日本の国蝶 オオムラサキ

あります。（資料館主任 唐澤武彦）

人形劇団むすび座 「かくれ山の大冒険」

日時 8月11日(日) 10時30分開演

場所 交流学習センター ゆめあるて

観覧料 高校生以上 1,000円 中学生以下 無料



第31回 24時間ソフトボール大会 参加チーム募集!



日時 8月24日(土)〜25日(日) 場所 豊丘村民グラウンド 募集締切 7月22日(月)

～シリーズ～ 豊丘の自然

No.187

ドクダミ
(ドクダミ科)



いろいろな薬効があり、毒や痛みをとるの
で、「毒痛み」との名が
付いたと言われている。
そんなドクダミの八重
咲き(写真大)が我が家
にあるので紹介しなが
ら、花の部位に付いて
書く。普通、花は花弁
萼雄しべ、雌しべから
成るが、ドクダミは花弁
も萼もない。花穂にび
っしりつく雄しべと雌
しべだけ。こんな花を

裸花と呼ぶ。クリ、ヤナギ
が有名。では、八重、四枚(写
真小)の白くて花のように見
える部分は何か。答えは総
包葉。だから、花ではない。
話は変わるが、今年のト
ンボの出現が気になる。い
つもより遅いのだ。七月七
日現在、確認種は四十二。
その内の三十四種(八十一
%)がそれに当たる。寒暖
差が大きすぎて、トンボも
困惑しているのか。

(山田 拓)



各試合とも接
戦で楽しく和気
あいあいと思わ
れていたと思わ
れます。特に優勝
決定戦の上市場
対下市場戦はフ
ルセットのすば
らしい決勝戦に
なりました。
最終結果は、
優勝・上市場、
準優勝・下市場、
第三位・古畑B
でした。
雨で屋外競技
が中止になりま
したが、反省会

さて、私が初め
てゴルフをしたの
はもうかれこれ三
十年以上も前にな
ります。しかしま
めに練習をし、そ
れなりにラウンド
するようになって
十五年程になりま
す。「ゴルフはメ
ンタルのスポーツ」
といえます。気持
ちが入りすぎ、思



うようにならないことが多
くありましたが、最近では
練習の成果も出て楽しいゴ
ルフが段々と出来るようにな
りました。
ゴルフは老若男女問わず
それぞれが自分の技量で楽
しむことのできるスポーツ
です。自分のできる範囲で

第四分館では、六月十六
日に夏季スポーツ大会を開
催しました。
週末に雨の予報がでてい
ましたので、屋外の競技が
行えるか心配で当日を迎え
ました。朝六時に役員が集
合した時点では雨が上がり
ていましたが、天気予報と
空模様、グラウンドの状況
から屋外競技の中止を決定
行われました。
今回ソフトバレーは、上
市場・下市場・古畑A・古
畑Bチームの計四チームで
行われました。

第四分館夏季スポーツ大会

公民館第四分館体育部長 近藤 代蔵

意見をもとめました。
最後に夏季スポーツ大会
に参加していただいた選手
の皆さん及び運営に携わっ
てくださった各自治会、公
民館役員の皆様にお礼を申
上げます。

第22回 豊丘村民ゴルフ大会

優勝者 小園 吉川貴俊

今回、百五十名を超す栄
えある「第二十二回豊丘村
民ゴルフ大会」で優勝出来
たことは誠に光栄です。こ
れはひとえにご同伴の三名
の方との楽しいゴルフの結
果が優勝につながったと同
伴の方々へ感謝申し上げま
す。

練習してそれぞれのゴルフ
ライフを楽しみましょう。
私もこれからもっともっと
ゴルフを楽しみたいと思っ
ます。

入賞結果
優勝 吉川 貴俊
準優勝 大原 俊一
三位 原 金良
四位 三石 和夫
五位 木下 和章
六位 福沢 卓見
七位 筒井 仁介
八位 小池 修
九位 平永 稔
十位 菅沼 義人
特別賞(女性一位) 池野 久巳

俳句 短歌

澄みわたる泰山木の天を向く
届きはしは一句添へある朴葉餅
若竹や一筋の雲風柔し
夕暮れや水田に蛙の声あふれ
竹の子に躓き笑う我一人
ぼうたんに朱傘の回路いく曲り
こでまりの大仰に揺れ雨ささず
修験者天へ矢を射る滝開き
俘虜の父が炊きくれし日菖蒲風呂
麦秋や新トンネルを抜けてゆく
段丘の雉子金管めきて鳴きわたる
新樹光段丘の子等見守りぬ
兄の忌や堂袋は灯を点し
潮騒や一山かけて枇杷熟るる
磯部セツ子
田中 静
片桐 洋子
森田 恵子
三島 保子
三島 里子
木下 眞水
松岡 照子
宮下 公
宮下 純子
林 恵美子
丸山 時子
矢島千勢子
北原 昭子

カメラ片手に村内ラフ。消え行く姿を残す記

第27記 あらゆる災害から村を守った堤防の桜

いよいよストックとなつ
ていた写真資料も、デジタ
ルが少なくなつてしまひ、
面倒なフィルムから過去の
記憶をたどり掲載すること
になつてしまつた。
デジタルでは今から十五
年ほど前からとなり、フィ
ルムの方が撮影の絶対枚数
は多い。この中で懐かしい
写真が見つかった。今は面
影もない天竜川堤防にあつ
た、黒い幹がゴツゴツとし
たエドヒガン桜である。こ
の頃の堤防はまだ未舗装の
ままで、並木の中央より市
田に向かい架かる赤い明神
橋も見える。桜の木は橋よ
り北側に多くあり、南は五
六本だったような記憶しか
残っていない。通勤通学で
歩いた人も多い堤防は、雨
が降れば大きな水たまりが
でき、夏場には木陰はでき
ても毛虫の住処となつて上
から下りてきたりと、散々
な思い出しが残っていない
が、桜の時期の見事に咲き
誇る姿は、長閑な田村の里
の景色とともにゆとりさえ
感じ、ゆつくりとした時間
がながれていた。
写真／文 宮下正弘



並木最北端の様子



川 柳

〈豊丘村川柳クラブ豊柳会〉

- ▼課題「植」 福沢勝美 選
田植機が乗用になる古希過ぎて 久保ひろし
機械化で消えたのどかな田植唄 西元 峯子
田植え終え令和の酒を田の神に 市沢 照子
軸吟…孫の為植えた松も今雑木
- ▼課題「雨」 互 選
てるぼうず願ひ届かぬ日もあった 原 美風
空見上げ雨を待つてる野菜たち 林 もも子
六月は三六豪雨思い出し 山本 義彦
▼自由吟 久保ひろし 選
期待した初なり母鳥味見 安田 喜子
期待した令和憂き事あとたえず 福沢 勝美
軸吟…星空に人工衛星確と飛ぶ

〈とよおか短歌会〉

白内障の父入院し二週間付き添いをした昭和遠のく 壬生 千春
背を反らし右足伸ばし左足も犬は目覚めのストレッチング 福澤貴美恵
大阪の女子中学生ら見張り田の水鏡みて「いいところやね」どう 筒井 恵子
若きつばめ雨どいの泥ついでみて近く古屋に新居かまえる 松下 泰見
流水がオブジェのように転がりて天竜川は夕日を反らす 毛涯百合子
後絶たぬ我が子苛む愚かなり踏むべき道を何故に通らぬ 大倉 知江
惑わせる「オレオレ詐欺」の紙芝居シニアの仲間はずと見つめり 松尾ヒサコ
『ひさの星』吾子らに読んだ日もあったと思ひ浮かびるちひろ館にて 大原真由美
来し方を互みに語る同期会八十路の耳に手をかざしつつ 福澤 亀人